

論文

# 大浜称名寺と柳宮連歌―称名寺蔵天保期連歌資料と『大願成就記』から―

伊藤 伸江

## 一 はじめに

三州大浜(現碧南市)にある東照山称名寺は、暦応二年(一二三九)創建と伝える時宗の古刹であり、また三河の時宗道場(大浜道場)として長く栄えてきた寺院である。称名寺は、数多くの古文書・古典籍を蔵することでも知られ、所蔵資料は、『称名寺歴史資料目録』(昭和六三・愛知県教育委員会)、『碧南市文化財第七集 称名寺の文化財』(平成元・碧南市教育委員会)などで紹介されている。その中には、連歌関係の古典籍があり、『老葉』<sup>1)</sup>や、『淀のわたり』<sup>2)</sup>などに加え、天保から嘉永、安政年間の連歌懷紙や百韻連歌の懷紙群の写しの類が存する。さらに、天保期には、詳細な記録として、江戸に滞在した第二十八世其阿毘上人の著作『大願成就記』も残されている。それゆえ、称名寺が蔵する江戸末期の連歌懷紙類の中から、天保年間に張行された連歌を手掛かりにして、天保期の称名寺と柳宮連歌との関係をとらえてみたい。

## 二 称名寺に存する天保年間の連歌

称名寺が蔵する江戸末期、天保年間の連歌資料には、次のようなものがある<sup>3)</sup>。

- ①天保九年十二月十日賦山何連歌「恵あるはるを待けり冬の梅」(百韻、句上無し)
  - ②天保十年正月二十四日賦何人連歌「折もをり時もとくなり花の春」(五十韻、句上無し)
  - ③天保十三年正月二十四日賦何人連歌「稀に見る花やひらくを松の春」(五十韻、句上無し)
- これらは、全て、雲紙模様の懷紙が一括りに括られ、①には「寿阿筆七十五才」、②③には「坂昌功筆」との小紙が挟まれている<sup>4)</sup>。連衆は、  
①声阿(発句)・昌成(脇)・其阿(第三)・信盛・貞起・通孝・豊貞・勝倫・光枝・章・信全・貞理・和・志如・幸雄・寿阿・永長・宗善・江山・守汶・修徳・宗寿・時宣・親信・英慎・典胤・重教・実休・定其・祐徳・当盈・道生・正志・直文・正剛・信藝・一頭・久啓・信弘・長標・司直・正信・昌凭・白紋・直恒・翠瀾・昌久・昌澄・昌功・清阿弥・貞把
- ②法眼昌同(発句)・声阿(脇)・其阿(第三)・昌功・貞起・通孝・豊貞・昌久・昌仙・光枝・勝倫・信盛・昌澄・昌成・寿阿

③法眼昌同(発句)・声阿(脇)・昌成(第二)・其阿・信盛・通孝・豊貞・勝倫・勝全・光枝・昌久・貞起・元丸・昌澄・昌功・寿阿

であり、いずれも三河の連衆ではなく、阪家の連歌師(昌成、昌功(昌成子)、以下資料の記述に従い「坂」の表記を取る)、里村南家(八代昌同)や山田通孝(鳥森神社)、大鳥居信盛(亀戸天神別当)らが参加しており、同時期に行われている江戸の柳営連歌の連衆と重なる。例えば、時期の近い天保十年正月十一日に行われた柳営連歌の連衆(將軍を除く)「昌同(発句)・信盛・昌功・貞起・通孝・豊貞・昌久・声阿・昌仙・光枝・勝倫・其阿・昌澄・昌成・寿阿」、天保十三年正月十一日に行われた柳営連歌の連衆(將軍を除く)「昌同(発句)・昌澄・昌功・貞起・通孝・豊貞・昌久・勝全・声阿・光枝・勝倫・信盛・其阿・昌成・寿阿」(いずれも静嘉堂文庫蔵『柳営御連衆次第』<sup>4</sup>による)と比較すると、これら①②③の連歌には、柳営連歌の連衆がほぼ入っていた。つまり、①②③も、柳営連歌に類する文化圏での連歌であり、その発句や脇を声阿なる人物が詠む百韻なのであった。

さらに、同時期の柳営連歌では、連衆中、「声阿」は、『柳営御連衆次第』の天保十年の項に「聲阿 三州大濱称名寺住/當年及同十一年臨時」、「臨時御連衆勤仕者」に「聲阿 三河大濱称名寺住/同十<sup>5</sup>」とある。合わせて、柳営連歌の集成である静嘉堂文庫蔵『松廼春』<sup>12</sup>をも見ていくと、声阿は、天保十年正月十一日花之何百韻「万代と」(「聲阿」句上に「三河大濱/称名寺」と注記)、天保十一年正月十一日何木百韻「陰あふく」、さらに天保十三年正月十一日初何百韻「玉松の」、天保十四年正月二十五日の山何百韻「松は代々」に参加している。出詠数はそれぞれ五句の出詠、出詠順もほぼ初折裏の最初か二句めと変わらず、四年間の参加は、同一人物としておかしくはない。「其阿」は「其阿日輪寺卅三世智善」(『柳営御連衆次第』)と記されており、江戸の浅草日輪寺から勤仕している其阿上人である。これらから、①②③の「声阿」は、称名寺から参加した住持、「其阿」は、日輪寺住職と考えられる。

ただ、時宗である称名寺の住職も、代々其阿と名乗っており、天保十年から十四年にかけての住職は、第二十八代其阿愍阿である(称名寺蔵『当山歴代等記』(称名寺歴史資料目録番号ホ12、ホ30)。時宗の中、住職が「其阿」を名乗る格式の高い寺院は複数あり、おそらく時宗触頭日輪寺の其阿と同名であることから、日輪寺其阿の活動圏である江戸や江戸との交流<sup>7</sup>に際しては、日輪寺の「配下」である称名寺側が、「声阿」を使ったものであろう。「声阿」は、称名寺開山の名であるが、それ故かどうかはわからない。

称名寺の蔵する天保期の連歌資料は、称名寺から、柳営連歌に一時的に参加可能となった時期、参加した声阿(其阿愍阿)が、柳営御連衆らと張行した百韻類が、寺に伝わり残されているものなのである。

### 三 天保五年から天保七年八月

声阿が、柳営連歌の臨時の勤仕者となったのは何故なのであろうか。臨時に参入しえた状況について、彼の行動を追いながら、詳しく考えてみたい。

声阿は、柳営連歌に姿を見せる天保年間には、幕府に寺の財政の窮乏を訴える目的で、旧記・書物類を全て携え、江戸に行っている。天保五年（一八三四）から助成を願い出て、最終的に天保十三年七月に加増を勝ち取った一連の経緯については、称名寺蔵『大願成就記』一〇十（称名寺歴史資料目録番号ホー一〇）に詳しい。『大願成就記』の記述を見ていくと、彼は、天保四年の大風雨に破損しても修復もできないほど、重なる借財にあえぐ寺に責任を感じ、天保四年末に嘆願を決意、天保五年正月に意を決して上京した。江戸では、同じ時宗寺院である浅草日輪寺に滞在して<sup>10</sup>、まずは称名寺の御由緒書と願書をまとめ、五月に寺社奉行に提出している。

ここから足掛け十年におよぶ粘り強い嘆願が始まったが、初期の経緯を記せば以下の通りである。

天保五年五月 寺社奉行所（月番土屋相模守）に御由緒書と願書を提出（借財返済、修復資金調達のため突富興行許可を願う）  
同年七月十七日 願い下げ（八月六日に願書差し戻し）

同年十一月十一日 寺社奉行所（月番脇坂中務大輔）に願書を再び出願

同年十二月二十四日 奉行所より調べには時間がかかるからと年末の帰村を勧められる

天保六年二月八日 口上書を脇坂中務大輔に持参

同年六月二十一日 脇坂中務大輔から、富勸化は許可を厳格化すると惣触れが日輪寺に来る

同年六月三十日 願書差し戻し

同年九月二十八日 寺社奉行所（月番脇坂中務大輔）に御由緒と願書提出（今回は、称名寺の由緒を前面に出して突富興行許可を願う）

突富興行はならず勸化で補うようにと水野出羽守と脇坂中務大輔から内々の指導もあるも、声阿聞かず

同年十月十九日 寺社奉行所（月番脇坂中務大輔）に突富興行許可を願う嘆願書提出

同年十一月十八日 嘆願書差し戻し

天保七年二月十六日 寺社奉行所（月番脇坂中務大輔）に金五千両の手当てを願う願書及び御由緒書を提出

同年二月十八日 寺社奉行所（月番牧野備前守）から嘆願書差し戻し

同年五月十四日 寺社奉行所（月番牧野備前守）に嘆願書を提出

同年六月十八日 寺社奉行所（月番井上河内守）から嘆願書差し戻し

同年六月二十八日 寺社奉行所（月番井上河内守）へ嘆願書を提出、翌年（天保八年）の御大札以後まで嘆願は差し控えるように言われる

同年八月三日 追願書を提出

声阿は、はじめ借財の返済と修復資金調達のために、突富興行の許可を願ったが、富くじの興行は天保年間には禁止に向かっており、許可されない。勸化をしてはどうかと勧められるが、勸化では収入が見込まれないので、拒否し嘆願書を提出する。しかし、幕府側も厳しく、天保七年からは富くじ興行ではなく、手当の嘆願としたが、助成も得られない。度重なる願書の差し戻しによって最初の三年の年月は過ぎていき、

天保七年には幾度も願を出す声阿と奉行所の間はかなり険悪になっていた。

願の最大の根拠となるのは、幕府との深い関係を示す寺の御由緒書であるが、天保五年に最初に差し出した御由緒書は、『大願成就記』二に「天保五年歳<sup>ヨリ</sup>同九戌年迄御由緒書控并天満宮縁記等印置也」として、「御由緒之覚」が見える。この御由緒書は、ほぼ同一の形でその後も必要な際に幕府に対して示され、また聲阿によって寺側の重要な覚えとして『大願成就記』に複数回記録されていくが、その中には、柳宮連歌に関わる由緒が存しており、少し長いが『大願成就記』二からここに引用する<sup>11</sup>。

一 広忠公於三州岡崎之御城天文十二年二月

廿六日之夜天満宮方御連歌発句

御感夢之義在之拙寺へ御勸請之

天満宮於神影前御夢想披之御連歌

御興行在之其時之住持其阿上人<sup>江</sup>

御第三被 仰付候御一巡左之通り

天文十二年二月廿六日

於称名寺披

夢想之連歌

神とのなかき

うき世を守哉

めくりはひろき

園の千代竹 広忠

玉をしく砌の

月は長閑にて 其阿

かすみのひまに

はふく友鶴 政家

雪はまた残る

浦輪の明離れ 仏光

作る田中の

道あらはなり 易屋

五月雨に晴ま

しらるゝ里つたひ 相阿

右御連歌之御懷紙頂戴而今所持仕候

同年十二月廿六日

神君様御誕生被為遊 御幼名可奉

差上之旨其阿<sup>江</sup>被 仰付依之御連歌之

御脇句を以 竹千代君与奉差上候處被為遊御

満悦 御名披之御連歌御興行有之猶又

御後采之御祈願申上候様蒙 上意

当日為御賀御文台長壹尺九寸／巾壹尺七分

御硯箱長九寸五分／七寸拝領而今所持仕候其節

伝通院殿方白銀巻物等頂戴仕候右之

御吉例を以其後 御代々若君様御誕生

被遊節被為奉称且寛永五年正月始<sup>而</sup>

於御城御連歌御興行被為在根元<sup>ニ</sup>御座候

御脇句者 広忠公被任御吉例

御代々様御脇句被為遊候御儀殊<sup>ニ</sup>御会之砌

今以天満宮御神影奉掛御興行被為在候事

天文年中之御吉例<sup>ニ</sup>御座候右等之御由緒

之訳を以浅草日輪寺其阿御連衆二被

召加御第三折々被仰付候

御由緒書の柳宮連歌に関わる部分には、次のようなことが述べられている。

① 松平広忠の夢想連歌において、称名寺住職其阿が第三を付けたこと

② 称名寺は①の連歌の懷紙の切を所持していること

③ 称名寺住職其阿は、①の連歌の脇句から家康の幼名「竹千代」を奉ったこと

④ 寛永五年正月からの江戸城の連歌の根元が広忠の夢想連歌であること

広忠の夢想連歌は、家康の幼名を生み、また柳宮連歌の源になっていると主張され、幕府と称名寺との繋がりの重要な証拠とされている。さらに細かくは、

④ 柳宮連歌で將軍が脇句を詠むのは夢想連歌で広忠が脇句を詠んだことにちなんでいること

⑤ 柳宮連歌で天満宮の神影を掛けて連歌を興行するのも夢想連歌に倣っていること

⑥ 御由緒により、柳宮連歌では、浅草日輪寺住職其阿上人が連衆に加えられ、時々第三をも詠んでいること

が記されている。称名寺ではなく江戸の日輪寺住職が柳宮連歌に出る点に関しては、『御府内備考 続編』<sup>12</sup>日輪寺の項「御連歌御由緒之義共」では「右称名寺ハ則日輪寺配下ニ而…」と説明され、「寛永五年於柳宮はしめて御連歌御会之為在之節時宗之僧老入御連衆可被召加被仰出仍而日輪寺も時宗一派之惣録寺ニ付十九代目之住持其阿を被召出則御連歌之間御床脇左之上座と被仰付候」と、柳宮連歌に時宗僧一人が出詠とされたゆえに、統括している日輪寺(時宗江戸役寺(触頭))が出たと述べる。声阿が江戸在住時に滞在しているのは日輪寺の塔頭林香院であり、声阿自身、御由緒書は「日輪寺旧記等取調具ニ書上候」と述べている。加えて、声阿は請願時、必ず状況を「本坊(日輪寺)」に報告している。称名寺の申し立てには、江戸役寺日輪寺の添状も必要である(天保五年五月二十九日付添簡、天保七年六月二十八日付添簡等が『大願成就記』に記録されている)。日輪寺と称名寺は上下関係にあり、日輪寺の確認・同意のもとで称名寺は請願を続けていた。また日輪寺は長く柳宮連歌の連衆をつとめており、それは称名寺も納得の上である。ただ①から④、⑥は、幕府が称名寺を取り立てる根拠になる事柄であるが、⑤だけは幕府から日輪寺に与えられた名誉となっている<sup>13</sup>。ここに称名寺が柳宮連歌により関わる余地はあるだろう。

#### 四 天保七年九月から天保九年

第三節で見たように、天保七年半ばまで、声阿の嘆願書は全く受け入れられない。声阿は、具体的には「有親公東一坊様御廟所御靈屋天満宮御社等追々及滅失候間 御再興并御供養御手当」(『大願成就記』三、天保七年五月十四日嘆願書)を願うが、天保七年五月十四日に出した嘆願書も、六月十八日に差し戻され、六月二十八日に再度願書を提出する。この性急さに、本坊(日輪寺)も、領主側も、再提出はもう少し後にしたらと意見を述べ、積極的ではなく、奉行所からも当然不興をかった。その際、声阿は「願書等者孝道和尚斗<sup>三</sup>相談いたし、最早外<sup>三</sup>とんと相談成候ものなし、可憐事也。」と、幕府側の長い強硬姿勢の前には、相談し力と頼む有力筋がもはやいないことを嘆いている。しかし、同年九月二十九日、日輪寺の紹介で連歌師坂昌成と知り合う。

九月廿九日、称宜子坂昌成老江本坊方丈道同ニ而罷越初而面談、御由緒之趣相晰候処、兼々承知罷在折々遊傍可参旨被申聞、猶厚御心添被成下候様頼入置、其後、天満宮由来記等御加筆相頼候処、出来之上、十月七日御持参被下旧記、又ハ種々之内談相頼候処内外御心配御心添被成下、其後諸事無腹臆御心添ニ相成、

十一月三日、坂宗匠へ御神宝天満宮も御内覧二入度旨及内談候処、御同人大キニ吞込、何連ニも追々御相談仕其場ニ至候様取斗方も可有之候、本坊方丈よりも厚御頼被下、此後ハ万事御同人之賢慮次第ニ任セ候：（『大願成就記』三）

坂昌成は、初対面時に既に称名寺の御由緒に関心を持っていた。昌成は日輪寺の連歌に、連歌師として参加しており、称名寺が寺社奉行に三年以上も請願していることが耳に入っていたのであろう。声阿は昌成に頼み込み、称名寺の天満宮由来記への加筆も依頼、腹藏ない間柄となり、三河から持参していた神宝を、内覧に入れた希望も相談し、昌成に万事任せることと決めた。昌成に、全幅の信頼を置いて、併走してもらったことしたのである。

既に知られたことであるが、『甲子夜話』巻四六「広忠公御夢想の御連歌」には、大浜称名寺に係りしてかなり詳しい記述がある<sup>14</sup>。『甲子夜話』の作者松浦静山は、連歌を坂昌成に学んでいるが、昌成の話として、

連歌師坂昌成に逢たるとき、春毎柳宮の御連歌あるは、何の頃より始るやと問へば、こは三州の頃始めなるべしと云て、広忠卿の御事跡を語り。

と記し、その後別の人から三州碧海郡大浜村時宗称名寺由緒を見せてもらったと広忠の夢想連歌部分（第三節引用箇所にあたる）を引用し、さらに別項でも、同一箇所に関する坂昌成の記を載せ、称名寺の伝記も追記する。逸話の語られた時期は不明だが、ここに見られるような昌成の知識は、声阿との関わりから生じたものであろう。『甲子夜話』にはまた別に夢想連歌伝承に係る称名寺の文台と硯の寸法、絵図も記されており、声阿の度重なる請願と本節に示す宝物の展示によって、称名寺の由緒類の内容も、世に知られ、静山の収集するところとなつたのであろう。

天保八年も二月に將軍が家斉から家慶に代替わりし（御大札）、幕府側が忙しく埒があかない。かたや八月十四日の三河の大風雨で、称名寺では御霊屋、御廟、天満宮等が大破した。そこで声阿は、さらに再興願を出し、翌天保九年正月十五日の親季公四百回御遠忌法要が努められるようにと御遠忌願書を提出、十二月二十六日の差し戻しには、昌成と相談の上二十九日再度提出して攻防している。この十二月末の奉行所への提出は大晦日までかかり、声阿にとり、「但此度之苦者一方不相成、後年察せよ」（天保八年大晦日条書き入れ）と、後の住職たちに向け本音を漏らすほどの苦勞であつたが、奉行所から帰り、当日夜中には坂昌成に報告したことで、新たな展開が得られている。

…夫より称宜子坂昌成老へ罷出候（中略）坂御老人、奥御儒者成嶋邦之丞殿<sup>江</sup>此節古キ御曆代御系図御調役被蒙 仰候間、御同人へ能々相噺、春ニも相成候へハ御引合可申候間、：（『大願成就記』四）

即ち、昌成が幕府の儒者成島司直（成嶋邦之丞、以下司直と呼ぶ）を声阿に紹介する運びとなっている。この件は、『大願成就記』六（『大願成就記』五は天保十年を主に扱っている）へと続き、天保九年正月下旬に昌成から司直へ手紙を出し、三月七日の面会がかなう。三月七日に、声

阿が御由緒・古い書物の写、絵図面を見せた結果、司直は松平の祖有親の由緒に着目し、「御由緒 有親公御儀者貴山ニ御葬送ニ相違無之、実ハ是迄何連とも御葬地不相定、異説まち／＼、夫故奉行所<sup>ニ而</sup>も是迄行届不申候」(天保九年四月三日条)と考え、八月二日には、出願を勧め「かたはだぬき御取持申心得<sup>マヤ</sup>御座候」と言ってくれる。

その後、声阿の保管する称名寺宝物は、司直(八月七日)、新見伊賀守(司直より八月十七日)・坂倉治兵衛(昌成より九月二日)・神田一位(昌成より中村文蔵とりなしで九月二十六日)・内藤安房守(司直より十月三日)・杉浦日向守(司直より十月三日)・柴田出雲守(司直より十月十九日)・田安中納言(昌成より中村文蔵とりなしで十月十四日)・清水御館(司直より十月十七日)・林大学頭(司直より十一月十一日)・天野弥五右衛門(昌成より十一月二十六日)のそれぞれの邸宅に運ばれて飾り付けされ、声阿が控えている前で幕臣たちに拝礼され、奉加された。宝物を有力者たちに個別に内覧させていくことで、称名寺は奉加を得られる。司直と昌成によって計画された、称名寺へ金銭的援助がなされて、かつ宣伝効果も抜群な戦略である。願書は既に八月四日に司直の加筆を経て八月中に提出されており、パフォーマンズのうちに天保九年が暮れる。

ここで、『大願成就記』巻六、天保九年十二月廿七日条を見ると、声阿は「当年も何ニと相済、尤御連歌<sup>ニ而</sup>又々心配、先々都合よく正月ヲ迎へけり。」と、この年もなんとか終わったが、「御連歌」でまたもや心配が加わって、しかしこの先の都合は良い感じで正月を迎えた、と、昨年と違い明るめの感想を述べている。ひるがえって、第三節に引用した「御由緒之覚」の後に、次のような文があった。

然ル処天保九年戊十二月二十一日、寺社御奉行所青山因幡守殿<sup>江</sup>右御由緒之廉を以亥正月十一日 御城御連歌御会<sup>江</sup>臨時御連衆ニ出勤之義、奉願上候処、御吟味之上、翌亥正月二日御同人様御自宅於御評席願之通り被 仰付候、二月十六日、御暇之節於躑躅之間白十枚拝領仕候、二百九十七年目<sup>ニ而</sup>初御由緒相頭冥加至極、難有仕合<sup>ニ奉</sup>奉存候、

心配をもたらしたという「御連歌」は、天保十年(己亥)正月十一日の柳宮連歌であった。先に、御由緒©だけは、幕府から称名寺でなく日輪寺に与えられた名誉となっているから、称名寺が柳宮連歌により関わる余地はあると分析したが、まさに、広忠の夢想連歌ゆえに、称名寺住職として声阿が天保十年の柳宮連歌の連衆に加わることを許されている。天文十二年(一五四三)から二百九十七年目に称名寺の御由緒が認められたと、声阿も感無量である。

また、柳宮連歌参加に関して、称名寺には『大仏御殿記』(称名寺歴史資料目録番号ホ一三)内に声阿筆『御連歌記録<sup>但</sup>天保九戊歳<sup>ヨリ</sup>同十四年<sup>迄</sup>出勤之書留也』(外題、内題は『御連歌出席登城之事』)があり<sup>15</sup>、冒頭部分から、天保九年十月の中に、坂昌成が声阿に懇憚したことがわかる。昌成のこのような積極姿勢は、司直が称名寺の御由緒に新たな価値を見出し、本格的に声阿の請願を援助する姿勢で動いたことから、あらためて御由緒の価値を認識したからであろう。昌成は、称名寺の御由緒、中でも天満宮由来記に既に関わっている<sup>16</sup>(天保七年九月二十七日条)。司直が御由緒中に有親につながる由緒の正統性の価値を見出したことが、柳宮連歌に勤仕している連歌師昌成にとり、有親が携えてきた



と伝わる称名寺の渡宋天神の、第三節に示した⑥の価値も加わって、柳営連歌に称名寺住職を参加させるという形につながっていくことは、自然であろう。

声阿にとっても、幕府からの永続的な助成獲得にはつながらないものの(注13参照)、当然ながら、柳営連歌出席は御由緒のはっきりした顕現であり、寺の財政を補填する手当の獲得への、側面からのアピールとなるのである。

こうした状況下、寺社奉行に柳営連歌への参加を願う準備が進んでいたであろう、十二月十日には、第二節で見た①の連歌が行われているが、声阿の発句「恵ある春を待けり冬の梅」からは、春を待つ梅に託しての、幕府の恩恵が訪れる時を期待する心情がよく読み取れ、昌成の脇「竹は代々ふる御園生の雪」からも、「竹千代」の幼名を嫡子に付ける將軍家の慣習を意識し、御由緒の内容を喚起させる言葉から將軍家を意識させ寿いで発句に繋いでいる意識を感じ取ることができる。さらにこの連歌は連衆の数が非常に多い。関根江山(注16参照)、司直も参加しており、これは、昌成が、声阿を柳営連歌に参加させていく布石として、江戸の武辺の知己にお披露目する連歌の席であったと考えられよう。

対して、柳営連歌が無事終了した天保十年正月二十四日には、第二節②の連歌が行われた。こちらは、先に見たように、連衆が柳営連歌の連衆にほとんど等しく②は同年の柳営連歌の連衆から、声阿、其阿、信盛の出詠順を変えたのみである)、②はおそらく日輪寺で、声阿に脇をあてて引き立てつつ、柳営連歌の感動もさめやらぬうちに張行したものである。そこでも声阿は、里村昌同の発句「折もをり時ときなり花の春」に「長閑なる日の恵しる袖」を付けており、①同様、幕府の「恵」をこいねがう心情を匂わせているのである。

## 五 天保十年から加増まで

天保十年は、天保九年の宝物の披露宣伝も虚しく、二月に願書が御勘定所から下げられ、八月までは辛抱の時期であった。声阿は、九月四日に司直から林大学頭に口上書を出すように言われ、翌日坂昌成に口上書の加筆を依頼している。すると、九月二十日に、徳川の御先祖のうち、有親の御廟所だけが捨て置かれて荒廃していると、他寺と比較し理論武装して嘆願した甲斐があったか、寺社奉行所から有親御廟所修復のための銀二百枚を得た。本願の成就ではないが、有親の御由緒の菩提所が称名寺であることが幕府に認められ、世に示され、修復の手当も得た訳である。この後、御三家、御三卿、御老中に寄付を募り、紀州・尾州徳川家から寄付を得た。だが、本願である加増の達成は、大御所家斉の体調悪化とその後の逝去(天保十二年正月七日(『大願成就記』七)があり遅れる。逝去の後、さらに家斉の百か日、一周忌となかなか動けず、天保十二年には「六月、七月、八月、九月迄月三度宛も、成嶋様、新見伊賀守様、坂昌成老人(伺「罷出ル」(『大願成就記』七)状況で、天保十二年十月以降、天保十三年二月までかけて、神宝の上覧の準備が司直、昌成、新見伊賀守によってなされていった。

一、天保十三年正月元日快晴 本坊より以役僧、当年より格別之御由緒之誤合故、表玄関方礼二御出可被成候(稿者注声阿)先々願相済候迄

者は迄之通ニ被成下度、：

(『大願成就記』七)

天保十三年の正月から日輪寺での称名寺の扱いが上がる。これは、將軍による神宝の上覧の実現が近づき、宗門内でも称名寺の御由緒の重要性が意識されてきたことを示そう(声阿は願いがかなえられるまではと格上の扱いを固辞する)。

天保十三年三月二十六日に、ついに將軍の称名寺宝物御覧があり、同年七月二十三日、夜に寺社奉行所(戸田日向守)から七十石の寄付が言い渡された。声阿はそのまま司直宅に赴き「互ニ顔ヲ見合唯落泪いたし」、重病の坂昌成宅<sup>17</sup>にも行き喜びを伝えた。日輪寺の方丈知全上人は、言い渡した戸田日向守と、司直・昌成にお礼に出向いた。それからの声阿は、御朱印地所が水損干損のない場所になるように依頼したり、日々忙しく過ごし、地所受け取りのため天保十四年二月十七日江戸を出立し、二十八日に帰郷したが、四月二日にはまた江戸に帰府している。

ここで、柳宮連歌との関係を見ると、天保十一年(庚子)、十三年(壬寅)の柳宮連歌については、『大願成就記』八、天保十三年三月十日に寺社奉行所に持参した御由緒書には、天保十年正月十一日の御連歌を勤めた記述の後に、

且同十一年正月十一日御連歌出勤之儀も願之通被仰付、当寅正月十一日も右同様相勤申候。

とあり、『御連歌出席登城之事』に、両年の柳宮連歌参加に関する一連の行事の記録と連歌の一巡が記されている。『大願成就記』七、十三年正月の「一、十一日御連歌之席<sup>18</sup>成嶋侯御出」からも聲阿の出席がわかり、天保十三年二月五日に声阿から司直、新見伊賀守に出した内願書にも「天保十年正月始而御連歌出勤之儀：引き続き子寅共<sup>19</sup>三ヶ年無滞相勤難有仕合<sup>20</sup>奉存候」とあり、天保十、十一、十三年の出席となる。天保十二年(辛丑)の柳宮連歌については、声阿は出席していないのだが、『大願成就記』七に、

丑正月当正月御連歌之儀、筑前太宰府一代一辺之登城ニ付出御連歌出席有之候間、野院見合也、とあり、そこから太宰府天満宮別当の大鳥居信全の柳宮連歌出席に譲ったことがわかる。

そして、天保十三年の柳宮連歌が終わり、第二節③の連歌が催されている。この連歌も、連衆は柳宮連歌と重なり、坂昌成が声阿を引き立てている。昌同の発句「稀に見る花やひろくを松の春」、声阿の脇「長閑けきめくみあふく言の葉」は、それぞれ「稀にみる」「松(待つ)」、「めくみ」に、厳しい状況が続いたが、加増の許可が幕府から鶴の一声でおりるかもしれないという期待を含ませている。その期待は時と共に高まっていき、同年二月に將軍の宝物御覧が実現した後の五月廿五日の声阿の内願書は、広忠の夢想連歌の御由緒から、

天満宮御社之儀も御造営之上 御供養料御寄附被成下、御連歌御同様年々正月御城御連歌江出勤仕候様被成下候ハ、御由緒之訳柄相立難有仕合<sup>21</sup>奉存候、

と、「前件ヶ條之趣容易不相成願<sup>22</sup>御座候得共」と断りながらも、今後も江戸城の連歌に毎年出られるようにしていたのだきたいとの大きな望みを述べるに至っているのであった。

## 六 加増決定後

加増が決定し、嘆願の必要がなくなった天保十三年末には、余裕が出たのであろう、天保十四年(癸卯)の柳営連歌について、『大願成就記』九にもやや詳しい記述がある。天保十三年十二月十七日条には、司直に「卯正月十一日御連歌御会に出勤仕度奉存候」と予定を伝える様が見え、十八日には、里村昌同に「明年御連歌出勤之儀、願込置候」、二十三日に「御連歌出席願書、寺社御奉行所阿部伊勢守殿<sup>江</sup>差出ス」、天保十四年一月二日に「二日、里村昌同老道同<sup>三</sup>、阿部伊勢守殿ニて、御連歌被<sup>仰</sup>付」と、『御連歌出席登城之事』と同趣旨の記述が見えてくる。合わせて『御連歌出席登城之事』の方には、天保十四年正月十一日の柳営連歌の一巡も記されている。二月十六日には柳営連歌出席の銀子を拝領した。

しかし、この後の柳営連歌には称名寺声阿の参加はない。『大願成就記』九を見ると、声阿は、天保十四年七月四日に宝物を持ち江戸を出立、七月十六日に帰村し、借財の整理などをなして、翌弘化元年(甲辰、一八四四)には、大浜に居た。

一、弘化元年元日二日、初年故御分郷役人等にぎく敷礼<sup>三</sup>出<sup>ハ</sup>、二日八ッ時過中風差起半身不叶<sup>江</sup>大心配色々薬用相加<sup>江</sup>、乍併寿命有之哉、佛神之護念故山内丈自由いたし、申之年迄四年之間命延申候

正月から分郷の役人たちに会っている。しかし、二日に中風をおこして当初半身不随になってしまい、大変に心配し治療したが、寿命があり、なんとか命には別状なかったと心情を吐露している。彼は、弘化元年から嘉永元年まで寺から動かず療養していたのであった。また

辰年<sup>江</sup>病氣二付認兼候処、明申年有親公御法事二付、琢全代僧、公辺出願出府二付無據、乍病中不足之処認置也。

と、嘉永元年(戊申、一八四八)を翌年に控え、これまで病気でこの『大願成就記』も書き綴れなかったこと、それでも、有親公の法事には琢全を行かせ、必要な記録を後代の住職たちのために書きつける、とする。このような健康上の理由から、声阿は江戸に行けず、継続的な柳営連歌への参加はかなわず、彼以後の称名寺住持も、柳営連歌に加わらないままであった。

## 七 終わりに

称名寺に残された天保年間の連歌は、寺の財政を救うため、加増の実現をしようとしていた声阿が、ほぼ十年江戸にいる間に、江戸の連歌師と交流し、柳営連歌の文化圏に加わっていった、その行動の一端を示す記録でもある。幕府に称名寺への加増を求めるため、声阿は、広忠の夢想連歌に深く関係する称名寺は柳営連歌の「根元之御由緒」(『大願成就記』七内願書)であると主張し続け、広忠の連歌切を契機に、称名寺の由緒や天満宮縁起に関心を持つ坂昌成と深く関わり、柳営連歌に足掛かりを得ていった。声阿は柳営連歌出席の記録『御連歌出席登城之事』を残して、詳しく参加の様子を記し、また江戸で張行した連歌懷紙類も持ち帰っている。

昌成は、連歌指導はもちろん、例えば、声阿に飛鳥井雅康の『富士歴覧記』(『大願成就記』では、『関東海道記』)明応八年五月三日条に、

中世の称名寺の姿(大浜道場)が見えることを示し<sup>18</sup>、昌成亡き後、子の昌功は司直の勧めに応じて、「御連歌御本書切」の横掛物への装丁やその箱に際し、江戸連歌師一同の寄付を連歌師仲間語らい、浅草鳥越明神社司鐸木豊貞も賛同した(『大願成就記』天保十三年十二月二十日条)。このような文学から美術の方面にも及ぶ、声阿の江戸の連歌師との関わりは、非常に興味深いものがある。

柳宮連歌の研究<sup>19</sup>はまだ端緒についたばかりであり、三河の称名寺からの柳宮連歌への参加については、未だ論が見られないところである。今回は、『大願成就記』の声阿の足取りを追うにとどまり、称名寺蔵『御連歌出席登城之事』や、また寺格を示す『独御礼記』に詳しく及ぶことができなかったが、これらを通じて江戸後期の柳宮連歌の具体相をより解明できるであろう。後稿を期したい。

# 【注】

本論での引用にあたり、称名寺蔵『大願成就記』(称名寺歴史資料目録番号ホー一〇)は、東照山称名寺の許可をいただき、現在碧南市市史資料調査室に所蔵されている写真版(冊子C115)を利用した。引用に際して御由緒書はそのままの翻字としたが、それ以外は、私に読みやすさを考え改行し翻字したことがある。また『大願成就記』は大きな出来事をほぼ時系列に書き連ねたものであり、例えば巻五、六の年代が前後しているように、全体としては完全に日次の体裁をとるものでもないが、日時がわかるものは掲出の際に示す。

1、拙著『室町期和歌連歌の研究』(2023・新典社)第三章二節『老葉』注の広がり—東照山称名寺蔵『老葉抄』の翻刻・紹介をかねて—において論じ、翻刻・紹介をなした。

2、引用は碧南市市史資料室蔵紙焼き写真(D-38)による。

3、「寿阿」にあたる人物としては、『柳宮御連衆次第』(注4参照)の「御執筆奉仕次第」に見える「寿阿日輪寺沙弥 自文政八弘化五迄勤仕歳八十」が考えられよう。

4、引用は国書データベースから、静嘉堂文庫蔵『柳宮御連衆次第』(523函5架<sup>264</sup>)による。また、鶴崎裕雄「柳宮連歌 発句・連衆一覧」(『帝塚山学院短期大学研究年報』第四二号・1994)がある。

5、「同」は年号が天保であることを指す。

6、引用は国書データベースから、静嘉堂文庫蔵『松廼春』(523函17架<sup>2715</sup>)による。

7、『大願成就記』九、天保十三年八月三日付書状(藤沢の本山宛)では、「称名寺／愍阿」と署名しているが、天保十三年九月七日条に見られる、成島司直からの書状の宛名は、「聲阿上人／猊座下」である。『大願成就記』の書状は、司直にそばとその他品物二種を差し上げたところ、

丁寧な返信をもらったので「御入念之書状尤御直筆也、印置也」として、「重陽前一日」の日付の書状を写したものである。ここからも其阿愍岡が江戸での交流には声阿と名乗っていることがわかる。なお、この書状は、司直書状としても称名寺に存する(称名寺歴史資料目録番号ムー二)。称名寺に多く残された成島司直の書状の中には「聲阿尊師」宛の書状もある。

8、第三節で引用する称名寺蔵『大願成就記』一(天保六年の条)には、日輪寺の言として「右寺(稿者注、称名寺のこと)拙寺配下二御座候」と寺社奉行所に奉る書付にある。これは既に寛政十二年(一八〇〇)に日輪寺から幕府に提出した書にも「称名寺は則日輪寺配下にて」と見えるところであり、同時に日輪寺は「時宗一派之惣録寺」と自寺を意識している(『御府内備考続編』卷之百十四)。

9、柳営連歌については、早く福井久蔵『連歌の史的研究』(昭和五・成美堂書店)に言及され、福井毅氏が「近世連歌旧事考―丙寅連歌記―」(『皇学館大学紀要』第八輯(昭和四十五・三)など)で柳営連歌に関し考究している。連衆に関しては、福井毅氏「御城連歌連衆勤仕稿」(『皇学館大学紀要』第十三輯(昭和五十・一))の論が家系関係を論じており、世襲に準ずる形で勤仕した様を明らかにしている。また、寺社がいかなる理由で参入しえたかを考察せんとした論に入口敦志「連歌御由緒考―山田通孝に至るまで―」(『社家文事の地域史』(2003・忠文閣出版)、後に入口『武家権力と文学』(2003・ぺりかん社)に入る)があり、鳥森稻荷社、鶴岡八幡宮、芝神明宮の場合が考察されている。

10、『大願成就記』に「宿坊香林院」(『大願成就記』九、天保十三年七月二十三日条)とある。白金松秀院に一時滞在(『大願成就記』六、天保九年五月一日条)していた以外は、日輪寺塔頭林香院に長期にわたり滞在していたようである。

11、家康の誕生日時と連歌会の日時には複数の説があるが、ここでは立ち入らない。

12、引用は東京都公文書館デジタルアーカイブ江戸明治期史料『御府内備考続編百十四』(DC1388)による。

13、『御府内備考続編』日輪寺の項には、「御連歌御由緒之義共」とは別に、寛政十二年十二月に日輪寺が提出した御由緒書が入る。その中で、寛永十五年柳営連歌会に日輪寺が出詠を申し付けられたと、日輪寺の立場で説明する。さらに配下である称名寺・遠州教興寺は連歌の御由緒により御朱印、時服等をもらっているにもかかわらず、両寺を支配する日輪寺は無禄であり、手当てを願っているともあり、柳営連歌出詠が、出詠そのもののへの褒賞はあっても幕府からの永続的な見返りがないことがわかる。この点は入口氏注9書で言及される。それゆえ、称名寺が柳営連歌に出詠する権利を手当てのために日輪寺と争う利益はない。

14、引用は東洋文庫『甲子夜話三』(1977・平凡社)による。

15、碧南市民図書館中部分館に所蔵されている写真版(冊子C-10)参照。声阿は、広忠公以来の御由緒があり、里村昌同の門人でもあるとして、三河大浜村称名寺声阿・里村昌同・日輪寺から寺社奉行所へ、声阿の柳営連歌参加の願書が出されている。

16、第四節内で引用した『大願成就記』天保七年九月二十九日条。また、称名寺には、天保十一年二月廿五日の日付で声阿の名と花押の後に「校正 坂昌成 花押」「執筆 関根江山 花押」とある『渡宋天満大自在天神尊影由来記』が残る。この由来記に関しては、『大願成就記』天保十一年二月二十六日条に「一廿六日坂氏江天満宮縁起持参候処、江山へ頼方可然旨被申候二付頼置也」とある。

17、『大願成就記』九、天保十三年七月二十三日条では「坂昌成老人大病之事」とあり、八月十一日昌成の死去（当年六十五歳）、八月十四日葬送（深川東誓寺、戒名は「篁隣院言阿昌成居士」）と記述される。

18、「大浜といふ所へ舟よせて道場にしばらく休て、本尊の御前にて 大はまの波路分ぬと思ひしにはやかの岸に舟よせてけり」（『大願成就記』天保十一年二月一日条）

19、注9の諸論の他に、綿拔豊昭『近世武家社会と連歌』（2019・勉誠出版）に、柳宮連歌の論が存する。

（いとう のぶえ／愛知県立大学日本文化学部教授）

貴重な資料の使用を許可された東照山称名寺住職祢宜田成然様、写真資料の閲覧などに際して種々の便宜を図ってくださった碧南市教育委員会文化財課豆田誠路係長と、碧南市市史資料調査室の北村恒調査員、伊豫田祥子調査員、築山拓磨学芸員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

この論文は、JSPS 科研費 23100609 の研究成果であり、また人間の尊厳と平和のための人文社会研究所における三河・遠江の地域研究に関する研究成果である。